

ツルレイシ (*Momordica Charantia* L.) 種子由来レクチンのサル類赤血球に対する凝 集活性の検討

関島安隆・藤倉由利子 (埼玉県立衛生短
大)

ツルレイシ (*Momordica Charantia* L.) レ
クチンは、ヒトA, B, O型赤血球に対して強い凝
集活性をもつ (藤沼, 1961)。我々は、このレク
チンがウマ、ウシ、ブタ、ヒツジ、ウサギ、モル
モットおよびニワトリなどの赤血球に対しては、
著しく低い活性しかもたないことを知った。そこ
で、このレクチンがヒト以外の霊長類 (サル類)
赤血球に対して、いかなる反応を示すかを調べる
ことにより、ヒト赤血球に特異なものかどうかを
探ることにした。

ツルレイシ種子から所定の方法により10%生理
食塩水抽出液を得た。これに硫酸を加え40~50%
飽和で沈澱する分画をとり、凍結乾燥した。この
1%生理食塩水溶液をツルレイシレクチンとして
用いた。各動物の赤血球1%浮遊液は、Alsever
保存血液から常法にしたがって調製した。サル類
赤血球は、フサオマキザル (*C. a2*, *C. a18*)、ワタ
ボウシタマリン (*S. o59*, *S. o60*)、ニホンザル
(高浜 103, 宮島 424, 570) およびチンパンジー
(レイコ, ゴン, プチ) で、すべて京都大学霊長
類研究所より提供を受けた。凝集活性は、マイク
ロタイター法により、2倍階段希釈したレクチン
液に赤血球浮遊液を等量混合し、37°C 60分間反応
させた後判定し、陽性を示したレクチンの最小希
釈倍数をもって測定し、凝集素価とした。

このレクチンは、ヒトO型に対して512倍、A
型、B型には128倍の力価をもち、ウサギ8倍、
ニワトリ、ブタ4倍、ウマ、ウシ、ヒツジ、イヌ、
モルモットに対しては2倍以下であった。

サル類では、フサオマキザル *C. a2* : 64倍、*C. a18* : 128倍、ワタボウシタマリン *S. o59*、*S. o60*
には2倍以下、ニホンザル高浜 103、宮島 424 に対
しては1,024倍、宮島 570 には2,048倍と高く、
チンパンジーレイコ、ゴンに対しては64倍、プチ
には32倍であった。一方、ニホンザル赤血球は抗
ヒトA、抗ヒトB、抗H抗血清とは反応せず、単
糖阻止試験ではFucoseによって阻止されないGa-
lactose型である。

したがって、本レクチンはヒト赤血球に特異な
ものでなく、ヒトO型とニホンザル赤血球に共通
したレセプターを認識するレクチンであることが
示唆された。

霊長類の上・下肢筋の機能に関する酵素組織 化学的解析

鈴木 惇 (東北大・農)・葉山杉夫 (関
西医大)

ニホンザルの骨格筋線維は、酵素組織化学的に
I型、II A型、II B型の3種類に大別されている。
I型筋線維は、収縮が遅いが姿勢保持に重要な役
割を担う。II A型筋線維は、収縮が速く長時間の
運動に適応している。II B型筋線維は収縮が速い
が、疲労しやすい。ニホンザルの大腿部では、膝
関節を伸展して保持する大腿四頭筋の深部と大腿
骨を内転して保持する長内転筋と恥骨筋に、I型
筋線維が多く分布することを明らかにしてきた。
今回は、足根関節を伸展する下腿三頭筋および足
底筋における筋線維型の分布について調べた。

3頭のニホンザルから腓腹筋、ヒラメ筋、足底
筋の中央部で筋の横断面全体を観察できるように
材料を取った。組織化学的ミオシンATPアーゼ
反応とNADH脱水素酵素活性の強弱により、筋
線維型を分類した。アルカリ処理後のミオシンA
TPアーゼ反応が弱い筋線維をI型とし、その反
応が強い筋線維をII型とした。さらに、II型筋線
維をNADH脱水素酵素活性の高いII A型と活性
の弱いII B型に分類した。

腓腹筋の外側頭と内側頭における筋線維型の分
布には違いがなかった。I型筋線維は、頭方では
34.0%と尾方(13.6%)よりも多く分布していた。
II B型は、頭方(42.8%)よりも尾方(61.1%)
に多く分布する。II A型は約25.0%で筋全体に一
様に分布していた。ヒラメ筋では、I型筋線維が
88.6%と大部分を占め、II A型は16.4%、II B型
筋線維は存在しなかった。足底筋では、I型筋線
維が18.7%、II A型は25.4%、II B型が55.9%で
あり、筋線維型構成は腓腹筋と似ている。I型筋
線維が多いヒラメ筋は、足根関節を伸展保持する
のによく適した筋線維型構成を成す。腓腹筋およ
び足底筋は、敏速な動きに適した筋線維型の構成